「そこで、キヴォトスでは、来たる日の敵の襲来に備えて最先端技術を駆使した訓練を行っております」
　壇上に立つ女性の言葉に合わせて、女学生たちが銃を撃つ映像がスクリーンに映し出される。頭の上に浮かぶ天使の輪のような模様がひと際目を引く。まるでゲームの中みたいだ。小日向 澪はやったこともないテレビゲームやスマホゲームを想像しながらそう思った。それに呼応するように、まわりの女子たちも「ゲームじゃん」「ほんとそれ」と囁くのが聞こえた。自分の想像は間違ってないみたい、とほっとする。
「我々キヴォトスは、才能ある女学生を募集しております。興味がある方はポスター、チラシ、HP などをご覧ください」
　壇上に立つ女性も、スクリーンで自由自在に動き回る女学生たちも端正な顔立ちをしている。顔審査でもあるのだろうか。一瞬よぎった思考は、まわりの喧騒にのみ込まれていった。壇上の女性が立ち去る前に騒ぎ出すまわりの女子たちに辟易しながら、澪も立ち上がる。もうすっかり放課後である。
「クレープ食べに行こうよ」
「いいね、カラオケは？」
　きゃあきゃあとはしゃぐ女子たちの隙間を、澪はスタスタと歩いていく。澪の身長は 142 センチで中学生にしてはかなり小柄だが、むしろその小柄さを活かして人の流れを縫うようにしていつも歩いている。あっという間に学校の敷地を出る。それを呼び止めるのは、１人だけである。
「澪」
鈴のような細く、しかし凛と響く声。
「お母さま」
「遅かったわね」
「放課後に講演会があったので」
　そう、と言いながら母は車に乗り込む。母はそれ以上の興味を持たない、というよりもすべてを既に知っている。澪も母に続いて車に乗る。迎えはいらない距離に住んでいるが、母は毎日澪を車で送り迎えする。もちろん、母が運転するのではなく、付き添いの運転手がいる。母も運転手も、澪も話さない車の中は静かで、澪はこの時間が嫌いだった。だが、澪の生活の中に、１人で登下校するという選択肢はなかった。

　「もうすぐ期末試験ね」
　食事の時間、母が言う。
「はい」
「しっかりやるんだぞ」
　父はにこりとも笑わず、澪の方を見ることもなくそう言った。父はいつもそうである。仕事のことで頭がいっぱいで、家族のことをしっかり見ることはない。澪のことを端から端まで把握している母とは対照的である。
「中間試験は１位でしたものね。期末試験も頑張るのよ」
「はい、分かりました」

豆腐ハンバーグを噛みしめながら、答える。お手伝いさんに頼むのではなく母自身がこだわって作る夕飯は、いつも立派だがどこか味気ない。

母の言うことはいつも一緒である。澪、名前のように人の道となるようにしっかりと生きなさい。それに従って生きることだけが、澪の人生だった。

食後は勉強の時間である。1 時間ごとに部屋に顔をのぞかせる母に進捗を報告し、お風呂の時間まで過ごす。澪には自由時間というものはなく、またそれが与えられたとてやりたいことなどないのだった。

⁂⁂*⁂*⁂*⁂* ⁂*⁂*⁂*⁂*⁂* ⁂*⁂*⁂*⁂*⁂* ⁂*⁂*⁂*⁂*⁂*

「夏目 未羽です。よろしくお願いします」

髪の毛を一つくくりにした転校生は教室の檀上でぺこりとお辞儀をした。ようこそ、とクラスメイトたちの言葉と共に拍手が沸き起こる。他人に興味がない澪でさえ、教室に新しい風が吹き込んだのが感じられた。